

もし平和を望むなら戦争を準備じゃあない。 平和を望むならば、平和を準備した方がいい。

(故・加藤周一)

「特攻」から「新しい戦前」の足音を考える

3日憲法記念日、「憲法施行76年 釧路集会」が開かれ、北海道教育大 釧路校の山元研二さんが、『新しい戦前』の足音の中で忘れてはならないこと』と題して記念講演をしました。黒柳徹子さんの番組の中で、タモリさんが今年「新しい戦前」になるかもと話し、大きな反響がありました。

山元先生は、ずっと研究してきた「特攻」を例に、憲法9条を守ることの大切さを訴えました。



開会あいさつをする平和フォーラムの代表

これでもいいのでしょうか。知覧での女性教師の一言がきっかけに

山元先生が鹿児島県の知覧特攻平和会館を訪ねた時のことです。特攻兵の遺書が展示されていて、母親が小さい子に、「あなたもこの人たちのように勇気を持たないと」と諭していました。そこは特攻を賛美する戦争資料館です。同行した女性の教師が「これでもいい

でしょうか」と山元先生に問いかけました。それから山元先生の特攻研究が始まります。

元特攻隊員の方から証言を聞く

高倉健の映画「ホテル」のモデルとなった元特攻兵のところに、何度も足を運びました。その方は・・・

フィリピンで圧倒的な米軍の戦力を見たとき戦争は勝てないと思った。1942年のことだ。それなのに国は特攻隊をつくった。特攻は死刑執行だ。特攻を考え出した連中は許せない。

知覧平和会館に展示されている遺書には本当のことは書かれていない。書かされたものだ。

特攻兵を世話した元「なでしこ隊」の女性からも聞き取り

あの遺書に本音は書かれていません。私たちは特攻兵から家族への手紙を預かることがあります。弁当箱の底に隠して持ち出して、投函しました。家族から返事が来ることはありませんでしたが、(そんなことをすれば捕まってしまう)でも敗戦になると返

事がどつと返って来ました。

脚本お兄ちゃんの手紙

やむなく特攻した青年、出撃を渋った青年もたくさんいましたが、志願したくないと答え

た青年が真っ先に撃つたとも元特攻兵は言いました。見せしめだったのか、執拗な説得があったのかはわかりません。

山元先生はこれらを題材に劇の脚本を書きます。そのひとつが「お兄ちゃんの手紙」、松本ヒロさんの一人芝居で好評を得ています。

兄弟一人と母親の3人家族。兄は進学し自由主義の思想に触れ、弾圧にも会いますが、母と弟は兄を信頼し続けました。その兄が突然、特攻に志願。死後に届いた遺書に、「自分は戦争で人は殺せない。だから特攻になって岩場に突撃・自爆して一人で死んでいく」との思いが綴られていました。

無謀極まりない特攻という作戦

軍が見込んだ特攻の命中率は飛行機で6分の1、ベニヤ製の船・震陽で10分の1、潜水艦・回天は3分の1。しかし実際の沖縄戦での特攻航空機



の命中率は3%。回天には脱出口はありません。爆死できなければ窒息死です。「伏龍」と呼ばれるものにも乗らずに肉弾で特攻するものもいました。作戦の効果はすでに考慮されず、ひたすら「死ぬ」ことだけが求められました。

特攻の指導者たちは

特攻を創設した指導者も自害した者、生き延びて慰霊に尽くした者様々です。中には日本の敗戦を部下に知らせず、敗戦後に志願を募って道連れで特攻死を選んだ者。フィリピンで部下を置き去りにして台湾に逃げた司令官の息子は、自ら特攻に志願し、家の汚名を晴らそうと、死んでいったそうです。

もし、昭和天皇が「もう少し戦果をあげてからでないと(講和は)難しい」と戦争の継続を決定しなかつたら、特攻の悲劇はなかつたはずですが。特攻作戦の初実施の報告を受けた天皇は、「そのようにしてまでせねばならなかったのか。しかしよくやった」と言ったそうです。

